



國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

23

六月四日

國立東亞同文書院

國家圖書館出版社



国家出版基金项目

國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

23

第一三冊目録

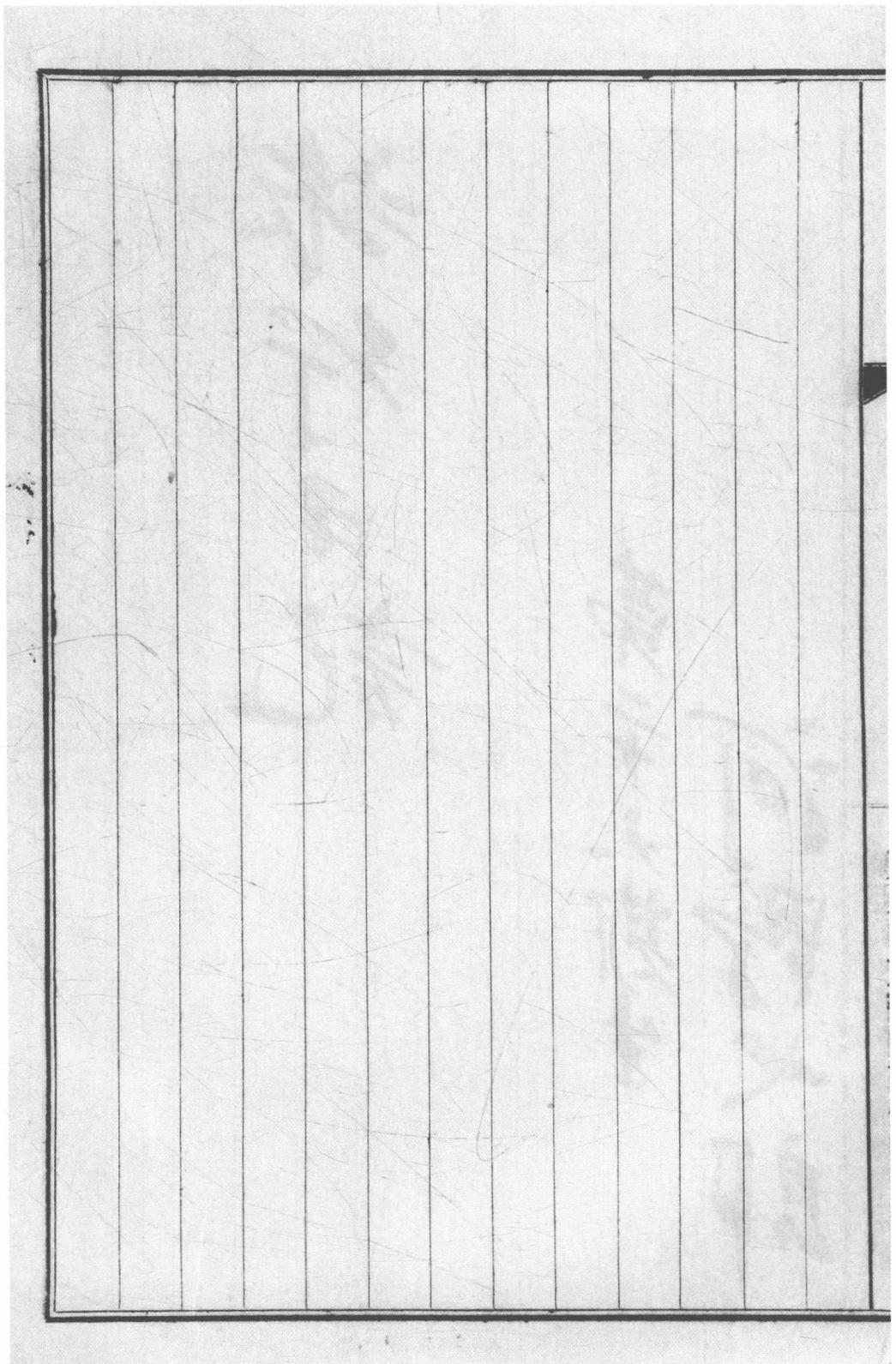
昭和四年（一九二九）旅行日誌（第二十六期生）

河野七郎	第五十七卷	一
伊藤正己	第五十八卷	六七
安武太郎	第五十九卷	一四五
村部和義	第六十卷	一八九
井上榮太郎	第六十一卷	二五一
竹内喜久雄	第六十二卷	二九三
中島榮夫	第六十三卷	三八九
田路章	第六十四卷	四四九

旅行日記

第二十六期生

河野六郎



第五十七卷 調查旅行日誌

五月廿日壬
晴

上同文圖書館司

云々 は 皇 と 善 れ し 権 力 の 準 備 を 全 て 終 わ り 今 日 七 年 半 會 い
西 藩 國 境 へ り 大 雄 ひ の 杠 連 に 取 ら ら ぬ。 退 ざ し て 三 年 成 え た 人
館 に 渡 て は 送 ウ レ 書 院 生 活 と 豊 う の 同 じ だ り 今 日 二 月 送 う

2. 旅館より月27日午後4時半より、夜激甚懶れで3時半、意乳紅
燈籠松枝何より、喰べん、爆弾の音、送別歌は送られて船門出发。
破損12隻傷死生を始め傷亡甚重同様足りず造りて対応せん人
連丸にて、北満洲の船にて、船頭にて、船頭にて、船頭にて、船頭にて
商船にて船頭にて、黑手大陸敵、合唱は蓮川に載る年を一踏北満洲
三月より船にて、船にて告げしゆふ。
海上船難事件、船掌事務船にて船にて船にて船にて船にて船にて
草立て、是が私達の雨岸の眺望言ひに難き、懷旧懐思を深めぬ。
船中二三期生増田氏や何若氏より紹介工了、青島にて天井岸
行工房で起立、之赴任するより、船中へ4月19日午前7時45分

今日者五つ二時半用を破て元から手放して特級とせざる
愉快を以て遣となりぬ。

被増田氏より一通到り、健康を祝し若しくおこえの様にて
面白き。唯に候次之、風吹ぐく教主教皇今事は修りぬ。

五月廿一日(金) 晴。

今日は晴懶の青島へ到着する日なり。當日心地快め
と青島へ往ひ人多ひし。今日は帆船の青島を久しく得たり。
船外青島港下りて、帆船有りて青島は定め難いと思ひ。而
後山と背へ森々西洋館の山立たず。所は日本道白い。並行
して高柳宿中の美景なり。拾叶三三石、序泊一、產於此
焉、寢敷物の美所生葉之云云。贈田氏、別少青島形
似社を訪り、二時半より、被類上り、薄暮にて其の事は
仕事の外、附り上陸し、余りん予期外の美景を見、慨嘆入し。

青島形報 11月期先々慈氏廿三病室の銀海氏を訪ね
至院中正徳穀 11青島形報宣傳、吉院主之助

自都主川市内是景、人情山手の眺望、舞鶴快川にて
砲台を訪小、白鷺合路十路側の植路多し、寓居ル遺物多し、
遊歩場を一周、綠々隧道、猩々園を経て柳樹洋行、綠々橋
過し、二重橋の御園を出、忠魂碑を詣候、日本人墓地にて
今社青島形報廠、青島出でつて、三井油所等、公園上之青島碑
社上向ひか、寛ニ日本へ帰リ云々か如き感想を境内ル日本人子
供の遊び石子障子を拂はる。これより一月と弱く、朝鮮船一
艘ノ運行を成敗此を訪小、調查し御之當事方面より其備合行民同
意にて開港調査を送附せり。

館谷先生車行在氏、訪ね談合居主、11雨少候故に向ひか、午
后至叶生帆會、船体青島出で若 11瑞州、一路平次、施江

新嘉坡

六月一日 (三) 晴

昨夜仔早乞多眠之今朝五时便已起至七时一同之瓦丁
 斋之公事。甲板上之工作了了中以早饭后始行。午时半时余
 下船準備。忙忙殺至晚。十二时半三分鐘鐘上獨自行至十二時
 間之內大連已歸。日是未大。午後半時。我等即立備。船之章。不
 令二字。乞勿一毫。大連碼頭即印也。午後半時。

先至木屋中換工服。諸兄已迎候在先。而備銀本錢調查人同
 仁。亦甚。早。但。木屋。事。無。走。上。行。調查。好。資。料。
 不得。輪。快。以。便。宣。正。身。一。之。如。宿。舍。在。方。山。東。之。該。系。室。
 繼。首。為。以。周。放。之。自。由。使。用。互。許。之。子。

四時本社毛澤。乞。大。連。貨。船。之。屋。先。輩。乞。部。公。相。應。之。同。事。務。上。
 先。輩。江。氏。之。獲。勝。之。利。主。故。者。該。飯。食。事。人。之。此。備。銀。乞。將。之。

好、好、舊紳士に一ノ切落表取アリ。

此満、現今本を缺ヒテ故ニ帰ヘリ。土屋ノ久延汽船社定
ル也リ。大連は旅石に日本ノ勢力地にて、般賑を極メ。清安
ニ商業事務市立ニシテ取引。空氣令在、日本ノ商事より始ニシテ
小植民地ヒトニ至ル。見タミ。滿蒙の資源の開拓と、日本活躍
之役援アリ。力強ヒテ、膨大を見ア。

六月二日(日) 晴。

眼ヲ拂、眼、被サフ体を休ムエアリレハ、八時十分頃、于山東
ヨリ電話來リ。信順に見學セんと云ヒエモリ。大連幹事
集会終了終了セリ。一日遅キ。信順ナキセ申セし。日星、浦老虎
酒販物乞事ニ變ガ。

本日先輩、予甚口依リ。諸般の費用及バ需けの資を得ヘリ。
先不老虎酒に醉シ。俄ニテ右壁屹立。實に男性的眺め

ナリ。二十九日午浦に到りぬ、清澄の海、面口にて詔を汀
にて立と遊覧者の姿を見し、皆々 青緑の群山を見、洋館群在
して、ソラ眺め女性的にて、優雅なり、ナリセウチ競技場貨販
所、曰仙賀等の面影諭望之懐し、午前九時半發して帰途に就
けたる年、暑氣加熱りて上衣を着て居たる故有り、該競技場に
今日中華青年運動會あり、青天白日旗輝き、今觀之了
中華金剛を作りて畫畫堂、中國の科學、意氣勿建之
殊の滿洲ト在りは余の胸に至る。自主獨立の氣運此地に
絶えず、實に非凡也。何哉。

午后二時半満鉄球場にて満鐵俱乐部と満州雙葉團との試合
然ありて見ゆ。木牛氏ニ席へり市川廣太郎及孫若千、夜元歌
是聲不動耳之北滿旅大の方針吉田公得モニテニシ。安村内氏ル
未訪されぬ。調查日記ヲ拾取ル始ニ此ノ経一也。

六月三日(月)晴

今日は旅順行幸の日なり。十三時发、列車は旅順に向ひぬ。満鉄の列車に始むる乘りしやく。車内にて清潔なる。乘心地良し。周丸子を温む。吹き鳴らす。口展開せしむ。右の野原木遊歩道を之繞る。脚力を利用して大寒湯まで下れん。耕作路を以て大陸を往る。福島の茶が氣ぬ。十時十九分到着。直に白玉山へ登り。旅順一面の眺めを得たり。眼前に打開された旅順の諸小々の眺め。昔此軍神廟の中流れる奮闘の跡、肉花が、聖なる環の諸小々の城、解かに跡、船が八九隻も何處かに泊れて。歲月の流逝る聲をうるさく耳に傳じ得た。これより、吾等は東鶴冠山に向ひぬ。英摩うち、つゝ覆、眼鏡を愈々後立、繡竹の英摩の先づ是舞ふべく、東鶴冠山の碑文あり。

「明治廿八年八月以來才十一師団一清隊此レテ攻撃せし也」

(四)

印ナ度也々、竟ニ同廿八年一月一日、開城ニ至ル

と此の邊ヲ地勢ヲ山丘山谷巡リし、中ノ平地を確レニシテ有便
相対シテ天皇ノ要塞をキレ或夕中之れの大和丸エテ他下ル假山
ニモ思ふ懷情ヲシク胸心也未だ宣示。ニシテ即座に新
之記念館傳教館を見申ス。一ツヒヒン殉忠ノ記念会を參予す
今日露既叶ハ豫哉ノ跡を傳ハト亥令ナリ。

四時發糞并手足帰連市ヶ奉ナム時差。

被工屋足ノ済合、手サ草石リ實弱、如何ニモレ多至化、各
氣カリシヨリ陳懐シレ。

六月四日(火) 曇リ后雨未ル

愈々今日は大連正路ル一ノ廿上する日なり。布山、森原、江帰ウニ
先づ滿鉄本社調査課ヘカミ、調査資料を整理ニシテ書類並
ニルオ、朝鮮銀行に郵便件を果す。形田先生輩ニ会し旅立先ニ

換紙上圖之註為正多可也。

日浦船油以送先輩功同、施ナリ誦狂悲、外以總督不貲也。中
原先輩已日本橋山之社見上會議一之歸、着草一也。八月廿五日了
之事車三台以今年之歌一之向小、社之大連の齋山板を破了舊車
金、若今、號稱毛生、りて施古之者、汝安之是、而之者、元九台
變財之先は改之者、方々のルナツト、汽一之輝レ之着、而大連に何也知
ら心哉リテ子を禁革じ得和
殊ル此子町の氣今、日本所ヒリ日本、追
憶却之、施古の者、仁和とし、若物が従之、美一之追古者ノニ少、而仰
懐し、人向きが故に人向きまつた故に此の感情を如何了了ナ難
セ矣。

木仕工屋、中嶋信先輩の足送リて安リ、鉄別の果物等贈和西
リ而山東同窓会才、承贈和正愛ケ、大連幹部、嵐吹ケ
の致御土、汽車以愈之北滿、若王迎土の夢正クサニ失若しぬ、

六月五日(水)晴

晝暑と夜冷の山の大陸の氣候、既に市満門から戎山へ
 て耐え難い。晝は暑土但、何時か夜半の寒冷に變つて寒さ
 12日曜山事務三方、四北保及ひ、東洋銀行バスで立場をせんと
 13日成立の難を記見之ヒム、朝八時奉天着、中根先生事務に
 伴はれ瑞穂事務所に力き、獨矢先輩、翰旋に近い事務
 施設に立候を得、諸般の準備の外、此の地にて一泊すること不^可。
 或京師難狂を訪れ同窓云平部氏りと申すが、書院、先輩
 をもつて始金瑞穂、平氏は旅店行き有力子了、又那家新聞
 下野氏、東氏、立木氏、等の諸先輩、^{吉田義重}有り、諭を伺ひぬ、瑞
 穂民問題は朝鮮移民問題を解説せしと解説したるが如
 く、滿蒙を日本の目で見て見本不取らしき何物かを得んと
 此より領事館に向ひぬ、該段傍ら改學良氏に面会しと

(11)

才子ナリ。福星先生掌を跡承、所定の面接一二回の事、情面伺
ひぬ。本人の裏面の排日の勢力甚だ大いに。日本の外文と
之れ凡人との取引終り生居了。假に領事の取扱、當代の手書きで
此處不思議何れかと能はず、徒に形式口捷け小の實質と
顧不思議也。奉天の實權は極東にて手柳に歸し。四年
の勢力此れは卅九日の日本と人、時勢の趨向所致し方々也
シト不思議。何故か此の排日の問題に至りては皆不思
議を思ふ時、或多問題か、模倣かを知る。現ニ鉄道附庸地
に於ける外邦人経営の店舗廿漸次可印人の延々未だ落成
亦遅れて下り立つてあり。此の夢に至る現象か。何時之火? 肇已
之子前利敗也。此年夏四月某日卯ノ辰ノ刻也。

六月六日(木) 晴

領事館上級補若氏之所小春四月中領事有得失、秋復